

メッセージアウトライン

コリント人への手紙 第一4:6～13 「誇ってはならない」

[6]「さて兄弟たち。以上、私は、私自身とアポロに当てはめて、あなたがたのために言
って来ました。それは、あなたがたが、私たちの例によって、『書かれていることを越
えない』ことを学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して高慢にならないため
です」

パウロは3章の初めから自分やアポロのことについて語ってきたが、それは
弁解や自己弁護のためではなく、実はあなたがたのためだったのだと言う。その目的は
①「書かれていること（すなわち聖書の教え）を越えないこと」②「一方にくみし、他
方に反対して高慢にならないため」であった。パウロがこのように言わなければならない
ほど、コリント人たちは聖書の教えから逸脱し、分派をつくり高慢になっていた。

[7]「いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もら
ったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかの
ように誇るのですか」

ここでは主語が「あなた」と単数になっているが、集合名詞
のように使われていると考えられる。すべてのものは神からの賜物としてもらったもの
なので（→Iコリント1:5～7）、彼らは誇ることができない。パウロはここでそのことを強
く指摘している。

[8]「あなたがたは、もう満ち足りています。もう豊かになっています。私たち抜きで、
王様になっています。いっそのこと、あなたがたがほんとうに王様になっていたらよか
ったのです。そうすれば、私たちも、あなたがたといっしょに王になれたでしょうに」

パウロはここで、常にキリストのしもべとして生きる生き方を否定して、この世の王
様のようにおごり高ぶって生きているコリント教会の人々を皮肉っている。

[9]「私は、こう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、行列のしん
がりとして引き出されました。こうして私たちは、御使いにも人々にも、この世の見せ
物もなったのです」

ここでパウロは当時の人々ならば誰でも知っていた一つの出来事を比喻として語る。当
時、外国との戦いに勝ったローマの将軍は、すべての戦利品を携えて、その軍隊と共に
ローマ市内を凱旋した。町中のすべての人々はその勝利の行進を見物した。そして、そ
の行列のしんがり死に運命にある捕虜の集団が加えられていた。コリント人はパ
ウロが批判しているような生き方からいって、まさに勇猛ぶりと分捕りものを誇る凱旋
将軍に似ていた。これに対してパウロたちは、あの行列の最後、死ぬべき運命にある捕
虜のようなものだということである。そしてこの世ばかりか天の御使いたちに対しても見
せ物になったと宇宙的なスケールで描写している。これらのパウロのことばはコリント
人の生き方と対比され、痛烈な皮肉となっている。次の10節も同様である。

[10]「私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者
です。私たちは弱い、あなたがたは強いのです。あなたがたは榮譽を持っているが、
私たちは卑しめられています」

キリストにあって賢い者となるために、この世の標準からみれば愚かになること(3:18)、
自らの弱さを通して神の力が現されること、キリストの死と苦しみにあずかってこの世

を生きること。このようなパウロたちの生き方に対して、コリント人たちはすでにこの世に天国が来てそれを謳歌しているがごとくに生きていた。

[11-13]「今に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、虐待され、落ち着く先もありません。また、私たちは苦勞して、自分の手で働いています。はずかしめられるときにも祝福し、迫害されるときにも耐え忍び、ののしられるときには、慰めのことばをかけます。今でも、私たちはこの世のちり、あらゆるもののかすです」

ここではパウロたちが直面している日々の生々しい現状が描写されている。パウロの今までの主張は机上の空論ではなく、彼の日々の生活によって裏打ちされているのである。しかしこれは彼が自己犠牲の精神によって作り上げた生き方でなく、かつて地上におられた時のイエス・キリストが味わわれたことであつた。パウロはただその御足のあとに従っているのである。→ I ペテロ 2 : 20 ~ 23

コリント人たちはパウロのこれらのことばにこたえて、悔い改め、正しい生き方をしていかなければならない。それが出来た時、パウロの今までの努力も報いられことになるのである。